

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第165号&第166号

(2024.4.14-2024.4.28)

- ◆ 参加者：しまねこくん、何となく短歌、菊池洋勝、帰ってきた
笛地静恵、sasa、上崎、うつわ、西脇祥貴、クイスケ、石原と
つき、西沢葉火、花野玖、おかもとかも、宮坂愛哲、輪井ゆう、
水の眠り、かれん、もりや、crazy lover、池田 突波、陰一郎、
雷(らい)、汐田大輝、佐竹紫田、海馬、只(ただ)ミキト、しろうと
も、小沢史、古城エツ、紗千子、半岬チロ、太代祐一、くろさ
わたお、花野玖、靈夢、はゆき咲くら、片羽 雲雀、涼閑、
Tomoko、鶴、さし、れいすいき、岡村知昭、雪夜替星、まつりへ
きん、石川聡、桂月、ひうま、星野響、りゅうせん、天やん、
えみ、やは、sasa、守宮、東ころろ、凧ちひろ、電車侍、かきも
ちもちり、名大ぼち、やぶ、森砂季、ろっる(襦袢)、坊 真由
美、月波与生(六五名)

◆川柳・俳句

詐称した袖の長さが死因です かきもちもちり
感覚に白鳥がいて血を流す やは
枯れた月我が子のような裸体のみ やは
口下手な弁証法が美しい 汐田大輝
ヘーゲルがみだらな鳥になっていく 汐田大輝
ツツジツツジコンビニごはんでもいいよ さー
ぶらじやーのなかでちつとまつばくだん かれん
木蓮の浮遊力には蓋をせよ かれん
確認する指先に止まる蝶 しまねこくん
遠足に行つて帰つて来ない父 しまねこくん
逃げ切つたお水はお湯になるのかな しまねこくん

泣き顔のゾンビを買いに横浜へ 岡村知昭

おとといの震度を知っている牡丹 岡村知昭

春暁や夢精の思ひ当る夢 菊池洋勝

シベリウスのな女体の雄大を 帰ってきた笛地静恵

校庭の水たまりから潜望鏡 帰ってきた笛地静恵

首吊りの紐が空から垂れている 帰ってきた笛地静恵

摩周湖で円周率がもめていた りゆうせん

海市へと時計の数字逃げてゆく 星野響

休日を全部のつけてるラーメン 石川聡

青春のアルゴリズムや片思い 宮坂変哲

ツツコミや空手チョップやあらへんで宮坂変哲

折り紙に書いたはじめのラブレター さー

出さない手紙に本気のわたくし 石原とつき

とうるとうるのトーストなんてはれんちな 太代祐一

それぞれの死角で回る観覧車 雷

泣き顔の虎に意見を求められ くろさわたお

ひとりでもまっすぐに咲いた振花 輪井ゆう

うちは全員理事国だから おかもとかも

ひとが死ぬ階段果てて桜餅 上崎

踊り場はやがて百年先の庭 上崎

そんなこと聞いておりませぬ地鎮祭 もりや

かがり火を焚くサラリーマンら 鶴

*

草餅や焼いてもてなす不倫宿 SYUSYU

土恋し土蹴るきみのふくらはぎ SYUSYU

純吟に炙り小いわし二合半 うつわ

街灯にあやされる中島みゆき 西脇祥貴

さつくりと人混みを混ぜるサロメ クイスケ

あの人がんの人になる 西沢葉火

彼の人の墓を仰ぎて藤の花 花野玖

事故物件かも知れぬ巣箱かかる 池田 突波

逃水のブレーキ痕は虹の色 陰一郎

白蝶は生きよ生きよと舞ひにけり 佐竹紫円

手ぶらで金曜日から金曜日までを 海馬

唇の紅サロメから額キス 忌^イ・ヤ^ム・ミ^キ・ト

からかえば口尖らせる頬刺かな しるとも

茹であがる腓臑恥骨半月板 小沢史

霧雨に障子を破るユーフォリア 紗千子

足下に私が殺した花吹雪 半岬チロ

雨男から晴れ女への旅路 忌^イ・ヤ^ム・ミ^キ・ト

信長も 自ら滅び 招き死す 靈夢

パラライズ今夜ハ雨ノ満月デスシネ 片羽雲雀

北十字祈りの声のする夜更け 涼閑

手の中でポロポロ折れるピラカンサ Tonko

エドモンド・ハレーと言って黙らせる まつりぺきん

会えぬ日の首滑らす指カサブランカ ひうま

行く春やカーラジオに流るる青春 天やん

白湯はもうただの水には戻れませんか えみ

呼び鈴を押すほど首が伸びてゆく song 守宮

煙草吸う天使と眺めている桜 東こころ

三日月や 地上はすでに 散り桜 電車侍

*

口笛で誰も知らない音を出す 月波与生

◆ 短歌

不快感 耐えられなくて追いつがるさみの気配にアイネク

ライネ 水の眠り

ひなげしの野原にすわった写真だけクンちゃんはまだこち

らを向いて 水の眠り

甘いのに酸っぱくって切ないのそれが恋愛なんだそうです
れいすいき

*

生きてると選択ばかり迫られる思惑の渦決意揺らいで 何
となく短歌

かごめかごめ クラスメイトというだけで甘えてた過去を
引きずるいまも 古城エツ

いまココが中身のすべて手にいれたかがあるからプライ
スレス はゆき咲くら

日永には名残惜しけり夜の闇天の川渡る飛行機の名付け親
雪夜彗星

明日帰る人のために買ういちごぶどう 桂月

やんかったやんなつちやったやんなつたつきはぎだらけあ
したもおなじ 凧ちひろ

◆詩・短文

もうおやめなさい

誰もしあわせになれない

楽しくもなく

美しくない

争いの世界

自らを貶め

つまらなくさびしい

おのれの世界

望むのは現実か

妄想虚構か

決めるのはあなた

もうすぐ夜は明ける (crazy lover)

◆作品評から

逃げ切ったお水はお湯になるのかな　しまねこくん

　　～煮え切らぬお湯がお水になるんじやね（名犬ぼち）

校庭の水たまりから潜望鏡　帰ってきた笛地静恵

　　～おはようございます。ユンケル校庭液って浮かびました。（おぼ）

首吊りの紐が空から垂れている　帰ってきた笛地静恵

　　～とても怖い句ですが、うつを経験したのでこの紐に気がついてしまうことが体感的にわかります。

晴れていて気持ちの良い天気でも、固く結ばれた紐を見つけてふらふらと近づいてしまう。充分な休息と医者と薬がこの紐に打ち勝てるハサミです。主体もどうかゆっくり休んでほしいなと思います。（森砂季）

草餅や焼いてもてなす不倫宿　susunu

　　～味と笑いのある川柳。昔の農家を改造した一軒家。生垣で外からは見えない。和服で盛装した女将が出迎える。もてなしは、地元の草で作った餅。ゆっくりと火鉢で焼く。それを見ている二人。いい句いだ。ありがたいが、早く二人になりたい。カップル（死語か）の表情が、見えます。（帰ってきた笛地静恵）

ひなげしの野原にすわった写真だけクンちゃんはただこちらを向いて　水の眠り

　　～誰の心の中にもクンちゃんはいますよね。今頃、どうしてるんでしょうね…同じように思い出してくれてたりするのかもしれない。（えつる）（楼瑠）

くあー切ない。最初、背景を読むまえは、亡くしたワンちゃんかなと思いました。そうでなくても、切なくてすてきな物語が見えてくる歌ですね。おめでとうございます。

(坊 真由美)

かごめかごめ クラスメイトというだけで甘えてた過去を引きずるいまも 古城エツ

くこのうた、好きです。記憶のなかの学校って、大人になると良くも悪くも「……あー……」ってなる。

その瞬間の切り取りが…… (森内詩紋)

確認をする指先に止まる蝶 しまねこくん

く初見は「を」と「に」にひっかかりが気になったのですが、「確認」に「止まる蝶」の句なので、ひっかからなくちやいけないですね。そうして心にも。(花野玖)

かがり火を焚くサラリーマンら 鵠

く大地震か。帰宅困難者。しかし、彼らは負けていない。どこかから見つけてきた、空き缶と薪。電気のない闇の底篝火を焚く。単なる焚き火ではない。被害者たちに見つけてもらいたいから。大災害との戦いの準備だ。今の時期に適した励ましの句。(帰ってきた笛地静恵)

幽霊とハーゲンダッツ食べる夜意外に朝も好きなんだって
ヴたこだよ

く「意外に朝も好きなんだって」に現実感がある。もう知り合いは天国にしかないという高齢者は多い。(月波与生)

進化論はなかなか鈍器たり得ない不惑 石原とつき

く《進化論不惑になりにくい鈍器》とやれば句意を残し

たまま「音字に収まりリズムも出るがどうか。(月波与生)

パートナー欲しいですって繰り返す私に助演女優賞くれ
れいすいき

〜映画「グッバイガール」を思い出したが調べたらマー
シャ・メイソンは助演女優賞を受賞していませんでした。
でもいい作品。(月波与生)

春の嵐山光三郎の道 帰ってきた笛地静恵

〜嵐山光三郎は懐かしい。というか『宝島』とか『ピッ
クリハウス』とか、あの軽薄さだけ戻ってきてほしい。
(月波与生)

性別は今川焼と書いておく 小沢史

〜今川焼、地域によって呼び名が違いますね。わたしの
住む地域ではおやきとか浅草焼きとか呼びます。「あのお
やつ」自体の名前はなんだって、「あのおやつ」ねと分か
ります。性別だってグラデーションですからそれでよいの
です。それに、皮の部分はみんなおんなじように見えて中
身はあんこ、クリーム、豆乳にうぐいす…もうなんだって
ありません。人々に親しまれたおやつのようにやさしく
まあるいところを持ちたいものです。(かれん)

職業に「無し」と書くたび背中から刺されるようで「フリ
ー」と書いた 水の眠り

〜サラリーマンを定年退職してから「自営」だったり
「アルバイト」だったり「無職」だったりを気分によって
使い分けている。(月波与生)

野良チェロが帰りの道をついてくる 石畑由紀子

〜「野良犬が帰りの道をついてくる」をチェロに代えた

だけやん簡単やんと思つたあなた、やってみなされ難しいから。川柳が誰にでも書けそうに書けない理由がこれ。
(月波与生)

土恋し土蹴るきみのふくらばぎ syusyu
くなつかしい。春。土も、空気も、温かい。子どもたちは、なぜか、走りたくなる。友のうしろを、追いかけていく。追いつけない。見えるのは、まだ日に焼けていない白いふくらはぎばかり。坂道を、登っているのだろう。舗装されていない。地面は土なのだ。(帰ってきた笛地静恵)